

自立活動の指導の充実をめざしたICT活用

～対面による指導・遠隔による指導のベストミックス～



特別支援学校や小・中・高等学校等の通級による指導での自立活動の指導において、感染症対策や地理的な条件等により、対面による指導や集団における指導が難しい際の学びの保障や、担当教員の専門性の向上等による指導の質の向上、校種間連携や特別支援学校のセンター的機能の活用、外部専門家との連携等による切れ目ない支援体制の構築などの観点から、ICTを活用した遠隔指導及び相談支援の在り方について研究し、その成果を広く普及することにより、特別支援教育の一層の充実を図ることを目的として本冊子を作成しました。

令和5年3月
山口県教育委員会

自立活動の指導（遠隔指導を含む）における ICT 活用の意義

自立活動とは

自立活動の目標は、「一人ひとりの幼児児童生徒が自立をめざし、障害に基づく種々の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」ことです。

「障害に基づく種々の困難を主体的に改善・克服する」とは、幼児児童生徒の実態に応じ、日常生活や遊び等の諸活動において、その障害によって生じるつまずきや困難を軽減しようとしたり、また、障害があることを受容し、つまずきや困難の解消に努めたりすることです。

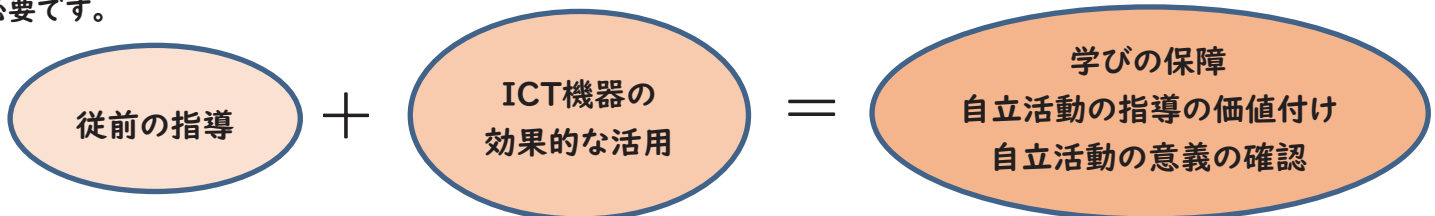
「調和的発達の基盤を培う」とは、一人ひとりの幼児児童生徒の発達の遅れやかたよりを改善したり、発達の進んでいる能力をさらに伸ばすことによって遅れている側面の発達を促すようにしたりして、全人的な発達を促進することを意味します。



自立活動におけるICT活用の意義

新型コロナウイルス感染拡大により、障害のある児童生徒の教育活動が大きく制限されることとなり、とりわけ、特別支援学校や特別支援学級、通級による指導における自立活動については、教師と児童生徒、児童生徒同士の距離が近かったり、内容によっては接触したりするなどの感染リスクが高く、対面による指導や集団における指導が困難な状況が生じています。

コロナ禍における自立活動の課題に対しては、従前の指導に加えて、ICT機器を効果的に活用し、対面による指導とICTを活用した遠隔による指導等のベストミックスを図り、障害のある児童生徒の学びの保障を図ることが必要です。



(指導例)

- ・対面で行っていた指導をオンラインで行い、その様子を録画することにより、児童生徒の評価、教員の支援の評価がしやすくなる。
- ・不登校傾向のある児童生徒に対し、リモートワークツールを活用することで学びの保障を行う。
- ・距離の離れている分教室や感染症対策のため対面が難しい病院等における交流及び共同学習をリモートワークツールや分身ロボット (OriHime) を活用して実施し、コミュニケーション能力の向上につなげる。

遠隔を活用することで期待できる効果



- 特別支援学校や小・中・高等学校等の自立活動の指導において、感染症対策や地理的な条件等により、対面による指導や集団における指導が難しい際の学びの保障
- 担当教員の専門性の向上等による指導の質の向上
- 校種間連携や特別支援学校のセンター的機能の活用
- 外部専門家との連携等による切れ目ない支援体制の構築



取組事例

特別支援教育コーディネーターによるオンラインを活用した実態把握（A小学校・B中学校）

（取組の流れ）

通級による指導開始時の様子を動画に撮影し、クラウド上に動画を保存した。個人が特定されないように、対象児童生徒の顔が映らない位置（背後斜め45度あたり）から撮影をした。ただし、机上ができるだけ見えるように調整した。

① ケース会議の概ね一週間前に、特別支援教育コーディネーターに視聴用URL及びミーティングID等を送信し、当日にオンラインでのケース会議を実施した。



② オンラインでのケース会議では「具体的指導のための3層マップ（※p.10）」を活用した。画面共有で特別支援教育コーディネーターが通級による指導担当教員等から聞き取った内容をリアルタイムで入力し、参加者で共有しながら進めた。また、特別支援教育コーディネーターの気づきや助言等をマップ内に随時追記し、リモートワークツール上で共有するとともに、通常の学級担任等からの情報についても随時追記した。

（成果）

・事前に撮影した動画や「具体的指導のための3層マップ」を活用したケース会議を実施することにより、必要な情報を可視化して参加者全員で閲覧できるため、対象児童生徒の実態や目標等を確実に共有することができた。



・上記の内容をクラウド上に時系列で保存し、常に確認できるようにしたことにより、指導の際に常に実態や目標を意識して進めることができた。

・オンラインの活用により、特別支援教育コーディネーターがリアルタイムで通級による指導のサポートを行う体制づくりができ、より実効性のある相談支援を実施できた。

理学療法士によるオンラインを活用した実態把握（H総合支援学校）

（取組の流れ）

① 指導の様子をオンラインで理学療法士側に配信

- 自立活動の指導目標
- ・自ら身体を動かそうとする意欲を高める。
 - ・必要に応じて補助的手段を活用しながら、座位の保持能力を高める。
 - ・車椅子での移動能力を高める。

具体的な指導内容

- ・座位の保持練習
- ・膝、肘の伸展（拘縮への対応）

② 指導終了後に理学療法士から以下の助言を得た。

- ・左足大腿骨の外側の筋肉が硬くなっている。そのため、左足が外側に引っ張られ、かかとが浮く。
- ・背中を反らせることで体を支えている。仰向けになった時に骨盤を軽く押さえ、腰を伸ばすと良い。
- ・座位の際に左側に体重がかかっている時間が長いので、時々姿勢を変える必要がある。このような場合、側弯になりやすいので注意する。側弯予防のための装具を作ってもよいかもしれない。

（成果）

・理学療法士の相談支援を必要とする児童生徒は障害の程度が重度であることが多い。コロナ禍の中で相談支援を安全に実施するために、オンライン活用は有効な方法の一つである。

・指導の様子や助言の内容等をレコーディング（録画）することができ、録画した内容を後で振り返りのために活用したり、指導記録として蓄積したりすることができる。



<学校での自立活動の指導>



<病院（理学療法士）>

通級指導教室におけるオンラインを活用したコミュニケーション能力向上の取組（A小学校）

（取組の流れ）

- ① A小学校の通級指導教室と、市内の小学校の通級指導教室をオンラインでつなぎ、吃音のある児童2名（A児とB児）を抽出した。
- ② ペア学習を複数回実施した結果、会話の回数が増加するなど、コミュニケーション能力の向上が見られた。



「吃音について～こんな風にして克服しているよ～」(記録より)

最初にB児がA児に自分の克服法を話した。「①最初の文字をあえて曖昧にする。「おはよう」を言う時、「お」が出づらいので「はよう」と言う、など ②自分がどのような時に吃音になりやすいかを知っておく。寝不足の時、人が多い環境など ③一人で話すのが不安な時は他の人と一緒に話す。」A児はB児の話をうなずきながら聞き、振り返りシートには「B児の方法を素敵だと思いました。でも、私はとりあえず、ゆっくりあわてずにやろうと思います。」とあった。

（成果）

- ・最初は緊張していたが、個別指導時と比べると多く話せており、回数を重ねるごとに会話の回数が増えた。
- ・A児は最初、オンラインでの学習に消極的だったが、「先生、やってよかった」という発言があった。
- ・授業後の振り返りシートの記入内容から、B児は聞く側に重点を置いて、話の途中で割り込まずに最後まで聞いて話すよう心がけていたことが分かった。
- ・普段なかなか人に言えない吃音の悩みについて、同じ吃音のある相手に聞いてもらったり、相手の思いや対応のコツを聞いたりすることで、互いが共感し、心強く感じる事ができる意義のある時間であった。

通級指導教室におけるオンラインを活用したコミュニケーション能力向上の取組（C小学校）

（取組の流れ）※下記表の回数、活動内容、児童の様子は抽出した内容

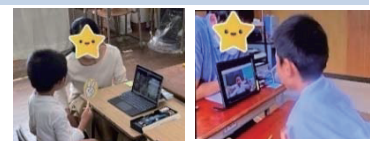
- ① 互いに離れた場所にある小学校2校の通級指導教室を利用している児童2名（C児・D児）を抽出し、オンラインでのやり取りを行う。
- ② 取組後半に、フリートークの時間を設定し、発言の回数の変化を記録し、客観的に評価を行った。会話の回数が増えたり、相手の返事に対して反応する回数が増えたりするなどの児童同士のコミュニケーション能力の向上が見られた。



回数	活動内容	児童の様子
1回目	自己紹介、好きなもの	・会話が弾まない。お互いが緊張している。教員が間に入る形で進行する。
3回目	夏休みの思い出	・C児はうなずきながら相手の話を聞くことができた。
4回目	クイズ大会（C児出題）	・C児は事前に練習をすることで早口にならずに相手に伝えることができた。
6回目	クイズ大会（D児出題）	・D児は自信がないのか、担当の顔を確認しながらクイズを進めた。
9回目	絵合わせ	・両児童の好きな題材にした結果、意欲的に取り組むことができた。 ・C児は相手が正解をしたときに拍手をした。D児は気持ちが態度に出やすい。
11回目	相談、ビンゴゲーム（C児のやりたいこと）	・お互いに自分のやりたいことを伝えることができた。異なる選択だったため、児童主体で話し合いをした結果、C児のやりたいことに決定した。
12回目	相談、絵合わせ（D児のやりたいこと）	・前回の結果を受けてC児から「D児のやりたいことをしよう」との発言があった。 ・D児はC児がカードを取っても自然と拍手できるようになった。


（成果）

- ・コロナ禍でグループ指導がしにくい中、同学年同士の関わりをもつことができ、コミュニケーションスキルの向上につながった。
- ・マスクを着けずに話をする事ができるため、相手の表情を意識したやりとりの練習を行うことができた。
- ・普段一緒に過ごす友達ではないため、相手の性格や考え方の背景を知った上でのやり取りは難しいが、自分で気持ちをコントロールしながら、他者との関わりを楽しむことができるようになった。



通級指導教室におけるICTを活用したコミュニケーション能力向上の取組（D中学校）

（取組の流れ）

- ① インターネットを利用し、通級指導教室の担当教員が生徒の興味・関心のある事柄に触れ、共通の話題で会話をすすめることでやり取りを深めた。
- ② 字を書くことが苦手であるので、パソコンのキーボード入力（ローマ字）で文章を作成する練習を行った。
- ③ タブレット学習やパソコンの学習ソフト、タイピングソフトを利用し、本人が自分のペースで  学習を進め、集中して取り組む時間を確保した。

（成果）

- ・ICT機器を使っていない昨年と比べると、ICT機器を介してやりとりを続ける方が、生徒との会話時間が増加した。生徒の興味のあることをWebサイトで検索したことで、生徒と共通の話題で会話を続けたり、世の中で起こっている出来事について生徒の関心を高めたりすることができた。
- ・パソコンのキーボードを使うことでローマ字入力の動作がスムーズに行えるようになった。また、字を書くことのストレスが減少し、「書字は苦手でもパソコンで文章を打つことができる」という自信につながった。
- ・ICT機器を用いて自分で行う課題（タブレットドリル、タイピング練習等）は、時間を決めて取り組んだ。正誤がすぐに分かり問題量が適量であるので、生徒が集中して取り組むことができた。学習の記録が残ることで生徒が課題を最後までやりきったという達成感を味わうことができた。

オンラインを活用した不登校生徒への支援（D中学校）

（取組の流れ）

- ① 学校と家庭間をZoomでつなげ、生徒とやり取りを行った。
- ② 顔が画面上に登場しないように、Zoomの中で、アバター（※）を使った自由対話を行った。
- ③ 本人の体調を考慮し、保護者とタイミングを合わせて行った。

（成果）

- ・アバターを活用することで、対人面における不安の軽減につながり、安心してコミュニケーションをとることができた。生徒自身がZoomに興味をもち、他者とのやり取りを楽しむ経験になった。

アバターとは …… 実際の姿と連動して自分の代わりに動く動物やキャラクター等のこと。

Zoom 内で「背景とエフェクト」から「アバター」を選択 → 好きなキャラクター（動物）を選択



本人が口を開けると口を開ける



本人が動くと同じポーズになる



フリーソフトとの組み合わせで表情を作ることもできる

〈 Zoom 内での無料アバターの活用 〉 ※著作権の関係でアバターは無料イラストを使用

オンラインを活用した不登校生徒への支援（H総合支援学校）

（取組の流れ）

① 体育

- ・カメラを用いた通信を行い、体操やダンス等、身体の動かし方の見本を教員が示したことで、内容を理解し、他の生徒と一緒に活動することができた。
- ・事前に活動の様子（グラウンドゴルフやポートボール等）を動画視聴することで、ルール等の理解ができ、生徒の安心につながった。



② 数学

- ・プリント配付ができなかった授業においても、大型提示装置に映したプリント問題をタブレット型端末を通して見ることで、他の生徒と同じように問題を解くことができた。

③ 特別活動等

- ・学習発表会では、タブレット型端末を活用してリアルタイムで出演し、学年の友達と一緒にステージ上で発表することができた。
- ・SNSにおける適切な言葉の使い方を考える授業にリモート参加し、友達の意見を聞いて自分の考えを発表することができた。



（成果）

- ・画面越しに友達と会話できるので所属感を持ち続けることができおり、登校に向けての意欲が高まった。
- ・オンラインの活用は学習の遅れを防ぐための学習機会の保障としての役割を果たした。
- ・オンラインであれば、学校行事への参加ができるようになった。

オンラインを活用した体験学習の取組（F総合支援学校）

（取組の流れ）

- ① 山口県独自の体験学習法であるAFPY（Adventure Friendship Program in Yamaguchi ※p.6）のアクティビティの中でオンラインを活用して行うことができるものを選定する。
- ② 本校、分教室の生徒を対象に、対面で行うアクティビティ、オンラインで行うアクティビティのそれぞれを行った。

（成果）

- ・オンラインでは、現実世界の人間関係の影響が少ないように見えた。実際に体験学習に参加するよりも、オンラインによる体験学習の方が参加しやすい生徒もあり、生徒同士で協働する姿も見られた。
- ・対面における集団での体験学習では、教員からの身体的な支援や行動の誘導によって主体的に取り組むことができない場面もあった。オンラインでは教員の働きかけが声のみとなり、生徒の自主的な活動を促すことにつながった。
- ・体験学習を通してコミュニケーション能力を向上する取組については、オンラインでも十分効果がある。



Q.また、AFPYをやってみたい人？	はい 10	いいえ 0
Q.リアルとオンラインどっちがいい？	はい 10	いいえ 0
■リアル ■オンライン		
アクティビティ後の感想等について		
並び替えの邪魔とかあったが、楽しかった。		
「（付箋を）移動させる人は一人に決めた方がいい」という意見でとてもうまくできた。		
お絵かき失敗したけどすごい！		
すごい簡単にできた。触らなかった。		
リアル事後アンケート		
Q.リアルとオンラインどっちがいい？	はい 5	いいえ 5
■リアル ■オンライン		
Q.また、AFPYをやってみたい人？	はい 10	いいえ 0

<生徒へのアンケートの実施>

★「Jamboard」（アプリ）の選定理由やメリットについて

- ①クラウドベースなので共同編集ができる。（仮想空間に集合し、一体感がもてる）
- ②手書きや描画ツール、付箋等を簡単に使用できる。（知的障害の子どもたちも容易に操作できる）
- ③アプリの導入が容易でマルチデバイスに対応している。（準備や管理が容易である）

アクティビティ名「したことある人？」		
活動内容について 「〇〇が好きな人？」等のお題に対して、グループを作ったり、席や場所を変わったりするアクティビティ		
活動のねらいについて <input type="checkbox"/> お互いのことを知り合う。 <input type="checkbox"/> 心や体をほぐす。		
ICT の活用の工夫及び実践のポイント 事前に付箋に名前を入力しておき、付箋の移動や色の変更を主にできるようにした。さらに、自由に操作できる時間を設定し、シート上での同時編集やリアルタイムの動きを楽しめるようにした。		
活動の様子 付箋が動くことや色が変わること、そして、同じ空間に集合できることに非常に高い興味関心を示し、意欲的に活動していた。操作方法の個別指導もほとんど必要なかった。		
繋がりを楽しむ分教室生徒	離れた場所でも 体験できる	色を変えて付箋を移動
アクティビティ名「ラインナップ」		
活動内容について 会話無し、ジェスチャー無し等の条件に沿って、お題の順番通りに並ぶアクティビティ		
活動のねらいについて <input type="checkbox"/> 言語以外の意思疎通について考える。 <input type="checkbox"/> 課題解決に向けてアイデアを出し合う。		
ICT の活用の工夫及び実践のポイント Zoom のブレイクアウトルームを使用し対面で行った。伝達時はミュートのため、思わずしゃべっても聞こえないというメリットがあった。Jamboard は2クラスずつのシートを準備した。		
活動の様子 正解が分かった複数の生徒が積極的に付箋を動かし、並び替えにかなり苦戦する様子が見られた。クラスで話し合う時間を設定し、「付箋は一人で」という意見が出て以降スムーズに進行した。その他、教室で伝え方のアドバイスをしていたクラスもあり、リアル、オンラインとも積極的にコミュニケーションを図っていた。		
伝達の様子	ブレイクアウトルームの活用	見事完成!
アクティビティ名「バドワイザー」		
活動内容について ファシリテーターから聞いた1人1文字ずつの文字を並び替えてキーワードを見つけるアクティビティ		
活動のねらいについて <input type="checkbox"/> 周りの動きに注意する。 <input type="checkbox"/> 人と合わせることにについて考える。		
ICT の活用の工夫及び実践のポイント Zoom はカメラ off、ミュートで Jamboard 上のみで文字の並び替えをするようにした。		
活動の様子 事後の振り返りで、答えが分かっていたけど触らなかったという生徒もいた。全グループ予想以上の速さで完成した。「パイナップル」など6文字も行ったが問題なくクリアすることができた。		
活動中の様子	実態に応じたアプリの使用は有効	すべて完成!

※AFPY (Adventure Friendship Program in Yamaguchi)

他者と関わり合う活動を通して、個人の成長を図り、豊かな人間関係を築くための考え方や行動の在り方を学び合う、山口県独自の体験学習法

〈山口県教育庁地域連携教育推進課〉 <https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/183/26582.html>

オンラインを活用した交流及び共同学習の取組（F総合支援学校）

（取組の流れ）

- ① おもちゃの作り方について確認するとともに、作り方の説明の仕方について学ぶ。（本校生徒のみ）
- ② オンラインでのコミュニケーションにおける留意点等を学ぶ。（本校、分教室それぞれで別に実施）
- ③ 本校生徒が分教室の生徒におもちゃ作りを教える。（オンラインでの合同学習）
- ④ 制作したおもちゃを使って遊んだり、他の生徒と飛距離を比べたりする。（オンラインでの合同学習）



（目標）

- ・オンラインという環境や相手の状況を考えてコミュニケーションを展開する力を養う。
- ・言語や表情、身振り等で自分の状況や思いを表現する能力を養う。
- ・目と手の協応動作を通して、自分の身体を基点とした位置、方向、遠近の概念を養う。

（成果）

- ・オンラインということを過度に意識せず、対面の時とあまり変わらない様子で会話や返事ができていた。
- ・制作時に、疑問点を自分から質問することができた生徒もいた。
- ・オンラインだけだとコミュニケーションが難しい生徒もいると考えられるが、オンラインと対面を組み合わせることで、生徒同士の関係が深まった。

オンラインを活用した交流及び共同学習の取組（G総合支援学校）

（取組の流れ）

- ① 同学年の生徒との人間関係の形成や、コミュニケーション能力の向上を目的とした集会活動に参加し、自分の学校の紹介やPRをしたり、相手校の生徒からの質問に答えたりした。集団への所属意識を高めるため、分身ロボット（OriHime）を利用して学習に参加するが、分身ロボットのみだと中学校側から本生徒の様子が見えないため、ビデオ会議ツール（Zoom）を併用した。積極的な発言を促すため、当日の流れや内容について事前指導を行った。
- ② 全国の特別支援学校とオンラインで中継を結び、遠隔社会見学を行った。本校がホスト校となり、社会見学の立案から運営までを担当した。県内や地域のよいところや魅力を紹介するためにアプリのJamboardやSimple Mindを使用した。

（成果）

- ・普段なかなか意見が言えない生徒も、アプリの付箋機能等を使用することで自分自身の考えを整理したり、グループワークをするための話し合いの手がかりになったりした。
- ・相手の意見を聞くことで考え方の幅が広がったり、相手のよさや自分の意見との違いに気づいたりするなど普段経験することができない機会を得ることができた。
- ・相手校の生徒からの質問に対して、分身ロボットを使って挙手し、積極的に発言したり、グループ活動の中で会話をしたりする姿が見られた。
- ・交流活動を進める上で、分身ロボットとビデオ会議ツールの併用は有効であった。複数のコミュニケーションツールがあることで、相手校の様子も把握しやすいようであった。



分身ロボット OriHime

オンラインを活用した交流及び共同学習の取組（H総合支援学校）

（取組の流れ）

- ① 本校と分教室をオンラインで接続し、合同バス遠足（動物園）についての説明を聞く。
- ② バス座席表に沿って椅子に座り、移動の練習をする。



（目標）

- ・ICTを活用した遠隔授業を通して、本校の児童と同じように分教室の児童にもバス遠足の内容を知らせることで心理的な安定を図り、見通しと期待感がもてるようにする。

（成果）

- ・座席配置や一緒に活動するグループの発表において、分教室の児童の人形を作り、本校の児童と一緒に移動したりバスの座席についたりする様子を見せたことで、分教室の児童も、自分の座席位置やグループの友達を確認することができた。本校の児童も、分教室の児童と一緒に活動するという見通しをもつことができた。
- ・本校、分教室を一斉指導にしたことで全員が「（グループの友達と）一緒」というキーワードを確認でき、当日のバスや園内での過ごし方の指導もスムーズにできた。
- ・分教室の児童も、本校の友達の声聞きながら事前学習を受けることで、期待感が高まった。
- ・遠足当日は、「一緒に座ろう」「一緒に行こう」など、本校の児童が、教員を介することなく分教室の児童を誘う場面が見られた。
- ・事前打合わせを行うことで、分教室の担任も指導の見通しをもちやすかった。



オンラインを活用した自立活動の取組（G総合支援学校）

（取組の流れ）

- ① 大型画面に映し出された紙芝居やパネルシアターを見たり、教師の読み聞かせの声を聞いたりして、場面の変化を感じ取る。（オンラインを通じて教師が直接病院の生徒とコミュニケーションをとるケース）

- ★視線を向けやすい位置、高さに大型画面をセッティングする。
- ★注視を促すため、紙芝居やパネルシアターはカラフルにする。
- ★読み聞かせが単調にならないよう、読み聞かせに加え、対象生徒が好む音を効果音として取り入れる。



- ・オンラインによるやり取りであっても、場面が変化すると、体を動かしたり映像を追視したりするなど行動の変化が見られた。対象生徒の行動の変化や快の表情を引き出すことができていることが分かり、指導の幅が広がったと感じる。
- ・教師の声が聞こえると動きが止まり、じっと聞き入っている様子が見られ、好きな音が聞こえると笑顔が見られた。

- ② 紙粘土等の素材を使って、素材の感触を味わいながら、玉状、棒状、板状の形を作る。（オンラインを通じて教師がモデルを提示するケース）

- ★教師がカメラの前で活動のモデルを示し、大型画面に投影する。
- ★画面上で素材が見えやすいように、手本で示す素材に色を付ける。



- ・オンラインを通じて活動のモデルを示すことにより、活動への興味・関心が高まり、自ら目の前の素材（紙粘土）に手を伸ばす様子が見られた。
- ・活動のモデルを示す際、目の前に画面があることで、どこを注視すればよいか分かった。

（成果）

- ・対面授業と違い、画面で教員と向き合うほうが集中しやすく、教員の言葉かけに耳を傾けたり注視したりする様子が見られた。
- ・画面録画で取組を記録したことで、教員の言葉かけへの反応や表情の変化を再確認し、支援の評価をすることができた。オンラインであっても、対象生徒の行動の変化や快の表情を引き出すことができていることが分かり、指導の幅が広がった。



通級による指導におけるオンラインを活用した発達障害児への支援（E高等学校）

（取組の流れ）

（生徒の実態：発達障害、友達との距離感が難しい）

① 外部専門家と1回目のケース検討（オンラインで動画視聴を行い、外部専門家から指導助言）

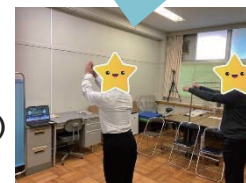
- ・体のイメージをつかむための運動や模倣活動を取り入れるとよい。ボディイメージが形成されてくると人との距離感が分かり、ソーシャルスキルの習得につながる。
- ・視覚的な情報に対する過敏さがあるため、通常の学級においては、座席の位置を前方の端の方にとるとよい。
- ・ストレスマネジメントの視点から、静的弛緩法などの方法も習得できるとよい。



動画を見ながら
ラジオ体操

② 外部専門家と2回目のケース検討（対面）

- ・距離感がつかめないのは、触感覚の混乱による問題がある。触感覚の指導も必要である。
- ・表情の認知については、「こうしたらこうなる」といった筋道を立てた指導が効果的である。
- ・ソーシャルスキルについては、本人にどのような行動をすべきか考えさせることが大切である。



③ 外部専門家と3回目のケース検討（オンラインで取組報告を行い、外部専門家から指導助言）

（成果）

- ・通級による指導については、オンラインを活用することで、「助言」→「実践」→「振り返り」→「助言」のサイクルができ、担当教員は見通しと自信をもって生徒の実態に応じた指導を進めることができた。
- ・保護者と指導・支援の方向性について共通理解するための手助けとなった。
- ・校内において専門家の指導・助言を共有することで、支援が必要な生徒の対応について共通理解が進んだ。

通級による指導におけるオンラインを活用した聴覚障害児への支援（E高等学校）

（取組の流れ）

（生徒の実態：聴覚障害、授業に集中できない、自分から表出することが苦手）

① 外部専門家と1回目のケース検討（オンラインで動画視聴を行い、外部専門家が実態把握をする）

- ・指導の様子を撮影した動画を外部専門家に視聴していただき、実態把握を行ったうえで指導助言を受ける。

② 外部専門家と2回目のケース検討（対面）

- ・集中力が高まり文章能力も向上しているが、作業量が増えるとミスが増したり、語彙力が増えても正しく使うことが難しくなったりすることがある。また、助詞や語尾など自分の解釈や推測のもとで認識していることがある。
- ・教員の他の生徒とのやり取りの際、声の大きさへの配慮が必要。補聴器が本人に合っているかを確認。難聴者は全般的に語彙力が少なく、語尾や活用形をあいまいに聞いていることが多くみられるため、抽象的な発問は理解が難しい。視覚情報と聴覚情報をバランスよく提示することが大事。助詞などの指導をする際は自立活動ではしっかり指導し、教科学習ではさりげなく訂正するバランスが必要である。

③ 外部専門家と3回目のケース検討（オンラインで取組報告を行い、外部専門家から指導助言）

- ・困ったときの相談体制と就労に向けての情報提供が必要である。
- ・聴こえが安定すると集中できるため精神的に落ち着くなど良い影響がでている。
- ・語彙力が実際にどの程度向上したか、1年次の作文と3年次の作文を比較することは客観的な評価となる。



（成果）

- ・生徒の聴こえの状況から補聴器の使い分けなど、専門的なアドバイスを得たことで、教員の専門性が向上し、生徒自身も補聴器装用の必要性を理解することができた。自己理解が深まったことで、苦手なことを再認識し、必要に応じて周囲に支援を依頼しながら、集中して前向きに取り組む姿勢が見られるようになった。

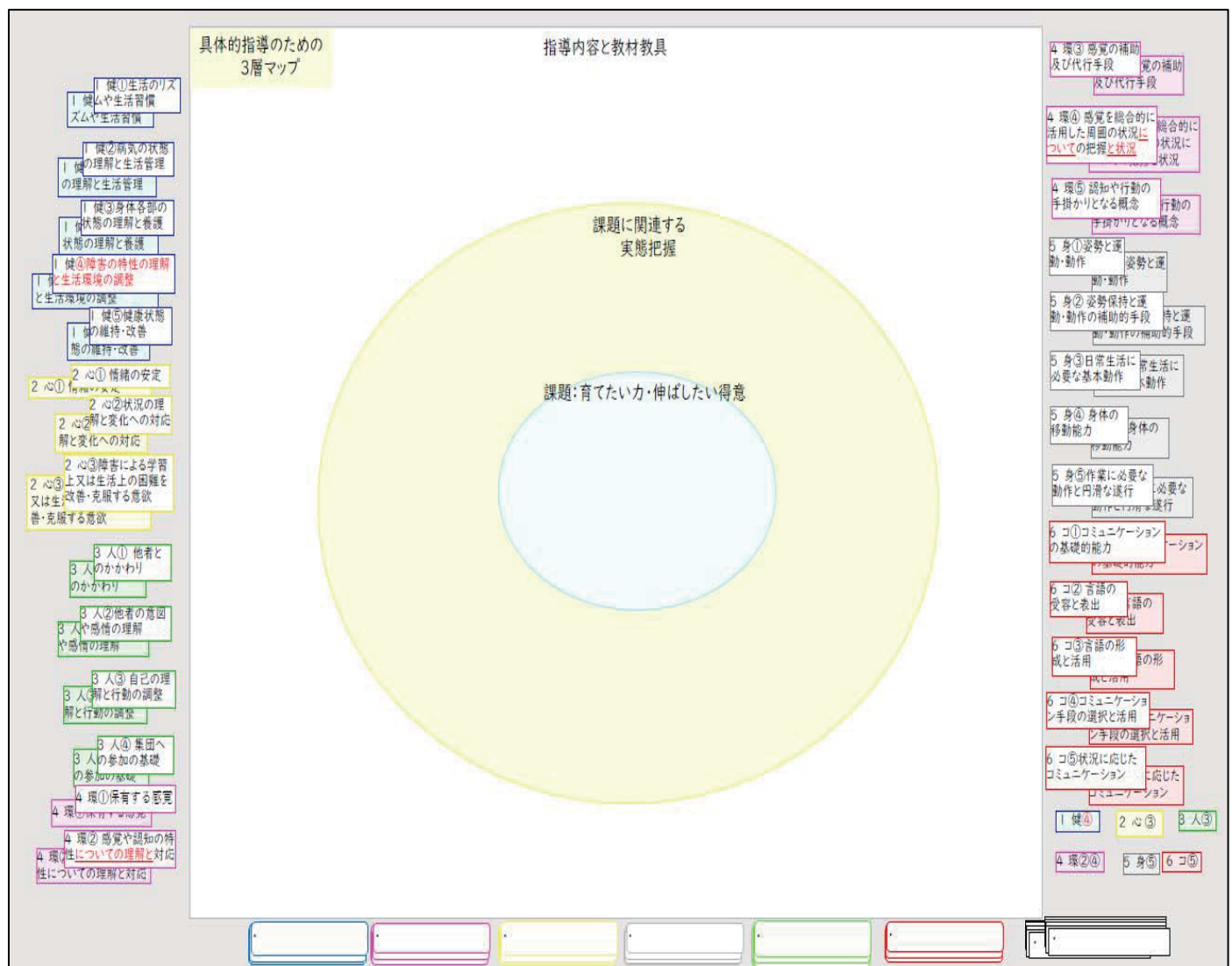
- ・語彙力が向上し、表現力が豊かになり、自分の意見を表出することができるようになった。



取組事例から確認できた効果（研究成果のまとめ）

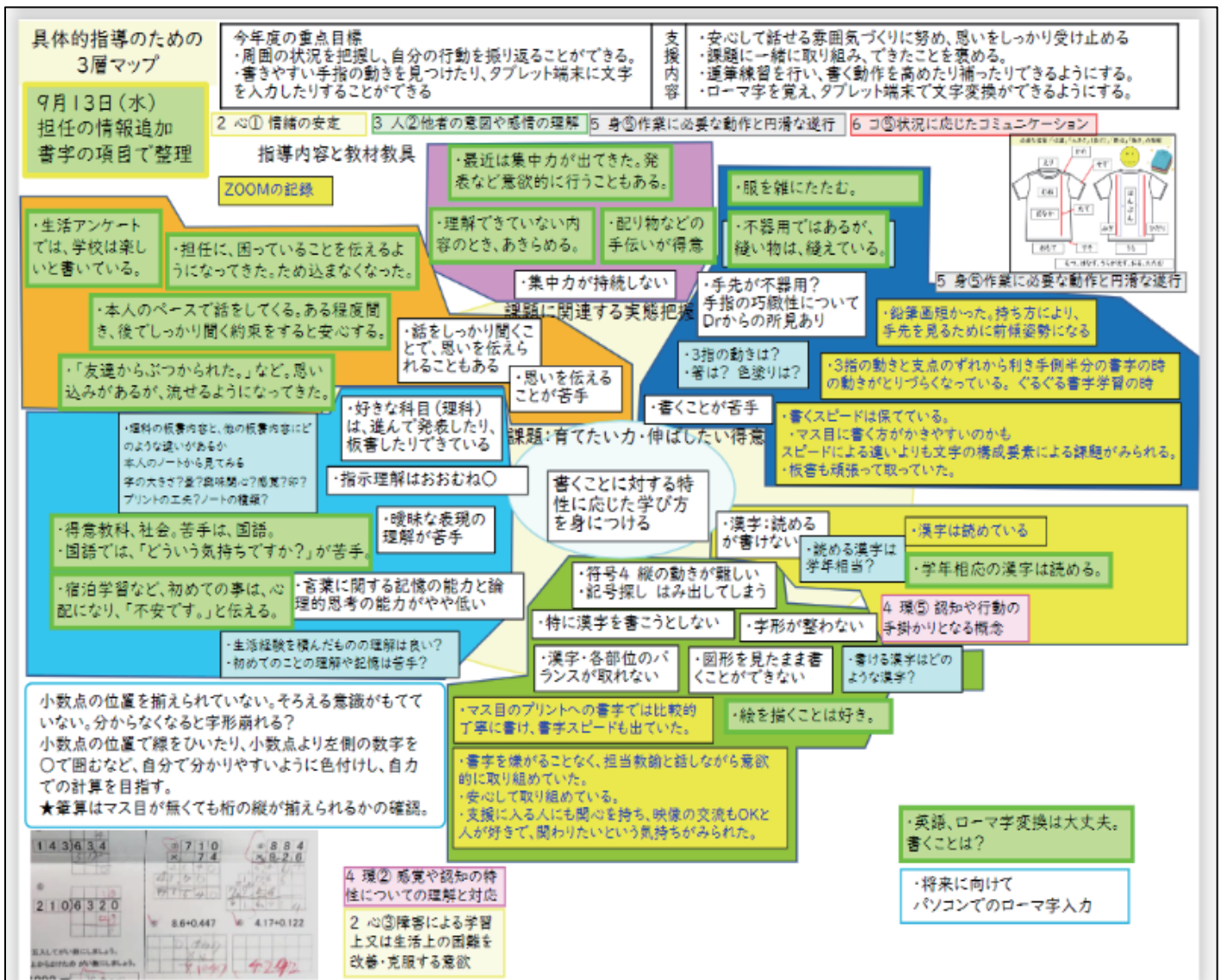
児童生徒の実態把握における遠隔活用のメリット（効果）

- ・事前に撮影した動画や「具体的指導のための3層マップ※下図」を活用したケース会議を実施した。必要な情報を可視化し、参加者全員で閲覧することで、対象児童生徒の実態や目標等を確実に共有することができた。
- ・オンライン上で、プレゼンテーション用ソフトやホワイトボード等を活用し、協議の経過や共通理解事項等を可視化しながら実態把握を進めることは、担当教員の理解度を高める上で有効であった。
- ・対象児童生徒の実態や目標等をクラウド上に時系列で保存し、常に確認できるようにしたことにより、指導の際に常に実態や目標を意識して進めることができた。
- ・コロナ禍での感染不安や移動が負担である児童生徒にとって、オンラインを活用することで相談支援を安全に実施することができた。
- ・指導の様子や助言の内容等をレコーディング（録画）することで、録画した内容を後で振り返りのために活用したり、指導記録として蓄積したりすることができた。



《具体的指導のための3層マップ》

担任、特別支援教育コーディネーター等が追記しながら実態と指導内容を共有し、具体的な指導を導き出す。



《通常の学級の担任からの情報及び地域コーディネーターが動画を視聴しての気づきを追記》

自立活動の指導と評価におけるICT活用のメリット(効果)

- ・オンラインは場所が離れていてもリアルタイムで情報を共有することができ、意見や質問ができることで主体的な活動につながりやすく、遠い距離を移動する必要もないので負担軽減もできる。
- ・オンラインはマスクを身に着けずに話をするができるため、相手の表情を意識したやり取りを行うことができる。
- ・アバターを活用することで、対人面に不安がある児童生徒も顔を出さずに安心してやり取りをすることができる。
- ・対人面に不安はあるがオンラインで顔を出すことができる児童生徒にとって、オンラインを活用することで緊張がほぐれ、対面では言えない悩みなどを打ち明けると、教育相談にも活用することができる。
- ・インターネットでの検索等、必要な情報を短時間で得ることができるので、児童生徒の興味・関心を即時に共有することができる。
- ・学習の記録が残るので、児童生徒が課題を最後までやりきったという達成感を味わったり、教員の評価のツールになったりする。
- ・書字の苦手な児童生徒が、書字の代わりにキーボードでの出力を行うことで、字を書くことへのストレスを減らし、安心して学習に取り組むことができる。



- ・普段なかなか意見が言えない児童生徒もICT機器を使用することで、自分自身の考えを整理したり、話し合いの中での手がかり(検索等)として活用したりすることができる。
- ・不登校の児童生徒への支援として、オンラインを活用することは有効で、画面越しに友達と会話することで、帰属感をもち続けることができ、学習の遅れを防ぐための学習機会の保障としての役割を果たすことができる。オンラインを活用することで、学校行事への参加も可能である。
- ・本校、分教室をオンラインでの一斉指導により、互いに「対面で一緒に活動する」ことへの期待を高めることができる。授業場所とは離れたところにおいても、リアルタイムで一緒に活動する内容を確認し、「誰とどんな活動を行うのか」の見通しを互いにもつことができる。
- ・アプリを使用し、協働する場面を設定することで、オンラインにおいても集団での体験活動を経験することができる。
- ・重度の肢体不自由のある児童生徒に対して、画面録画で取組を記録、蓄積をすることで、その場では確認できない教員の言葉かけへの細かな反応や表情の変化を再確認し、客観的な評価をすることができる。
- ・リモートワークツールを活用し、日常的にメッセージのやり取りをする、ファイルの共有をする、必要に応じてビデオ会議を実施することなどにより、教員が安心して指導を行う環境を作ることができる。
- ・対面授業と違い、オンラインの画面であれば教員と向き合い集中できる児童生徒もいることや、画面と向き合うことで注視につながりやすい。

外部専門家等との連携における遠隔活用のメリット(効果)

- ・ZoomやTeamsなどのリモートワークツールを活用し、外部専門家と遠方でも連絡が取れるシステムが構築されると、専門的な助言を得ることができるため、教員(通級担当者・通常の学級の担任)の専門性が向上し、より質の高い指導・支援を行うことができる。
- ・オンラインを活用して助言を得ることで授業のPDCAサイクルを効果的に回すことができ、見通しをもって指導を進めることができる。
- ・授業の様子を動画等で記録し、クラウド上にアップロードして情報共有する際には、個人情報保護の観点から児童生徒の顔が見えないように加工する必要があるが、細かな生徒の実態が伝わらない、外部専門家の見たい視点と動画撮影者の意図が合わない(手元が見たい、身体のバランスが見たい等)ことがあるため、1回目は対面での実態把握を行い、2回目以降はオンラインの形をとることが望ましい。
- ・外部専門家から得た知見やICTを活用した記録を校内において共有することで、支援を必要としている児童生徒への理解を深めることができる。



遠隔による自立活動の指導の実施に係るチェックリスト

本チェックリストは、各学校における取組の成果を踏まえ、遠隔（オンライン）を活用した自立活動の指導及び相談支援を行う際の確認事項を整理したものです。

遠隔（オンライン）を活用した取組を計画、実践される際にご活用ください。

記入者

■取組内容（概要）

■遠隔を活用した実態把握や外部専門家の参画による相談支援に関して

No.	確認内容	チェック	詳細
記入例	オンラインを活用して関係者間で実態把握や情報共有を行うことについて、本人・保護者に説明し、了承を得ている。	○	・○月○日に、本人、保護者に概要を説明し、了承済み。
1	オンラインを活用して関係者間で実態把握や情報共有を行うことについて、本人・保護者に説明し、了承を得ている。		
2	内容に応じて、オンラインのみで実態把握を行うか、対面とオンラインを組み合わせるかを検討している。		
3	個人情報保護に配慮しつつ、より実態把握がしやすくなるよう、撮影の向きや距離、カメラの台数等について検討している。		
4	外部専門家の参画を得る場合、取組の目的や具体的な進め方等について、事前に共通理解が図られている。		
5	ビデオ会議ツール（Zoom、Teams 等）を活用して、外部専門家や関係者と協議を行う場合、協議内容の共通理解が図られるよう、画面共有での資料提示やホワイトボードの使用等により、協議の経過や共通理解事項が可視化されている。		

■遠隔を活用した自立活動の指導と評価に関して

No.	確認内容	チェック	詳細
1	対面とオンライン双方のメリットを踏まえ、対面での指導を中心に行う内容と、オンラインでの指導を中心に行う内容を整理している。		
2	授業を円滑に進めることができるよう、ネットワーク環境やカメラ、マイクの使用、機器の操作方法等について事前にリハーサルをするなど、確認を十分に行っている。		
3	オンラインを活用して、画面上で教材を提示する場合、教材の見やすさを考え、使用する教材の色、大きさ等や提示の仕方について配慮している。		
4	評価をより充実させるため、関係者の了承の上で、指導の様子等をレコーディング（録画）して、指導記録を蓄積している。		
5	オンラインを活用して学習することに関して、機器の使用感や学習上の気付き等について対象児童生徒に確認し、指導・支援の改善に反映させている。		
6	オンライン上で使用する教材や画像、映像等について、著作権上、使用に問題がないことを確認している。		

【参考資料一覧】 ※二次元コード及び下記 URL よりダウンロードできます。

資料名	目的・内容等	二次元コード
自立活動の指導の手引き	障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導領域である「自立活動」の指導の充実を図るための参考資料	
特別支援教育におけるICT活用ガイドブック	特別支援教育における ICT を活用した授業づくり、指導や支援の充実のための参考資料	
子どもの心に目を向けるポジティブ行動支援 -ASD指導事例集-	自閉症の特性や基本的な対応について理解を深め、担当する子どもへの指導方針の検討のヒントにできる参考資料	
通常の学級における特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりの進め方	特別支援教育の視点を取り入れた、学習指導案の作成のポイントや授業の進め方の参考資料	
支援のための校内体制づくり ～LD等の幼児児童生徒への支援～	全教職員が共通理解し、いつでも、どこでも、だれもが対応できる校内体制づくりのための参考資料	
高等学校における「通級による指導」について	高等学校における「通級による指導」について理解を深めるための参考資料	
マルチメディアデージー教科書の活用	「マルチメディアデージー教科書」の円滑な導入に向けた参考資料	
「個別の教育支援計画」Q&A及び記入例	特別な支援を必要とする幼児児童生徒への切れ目ない支援体制の充実のための参考資料	
個別の指導計画・個別の指導計画作成マニュアル及び様式	必要となる項目や様式等を示した「個別の指導計画」作成のためのマニュアル	
個別の指導計画・個別の指導計画の記入例	「個別の指導計画」作成のための参考資料	
合理的配慮について考えてみませんか	具体的な配慮の検討や保護者との合意形成に向けた話し合いを進める際の参考資料	

<ダウンロード先: 山口県教育庁特別支援教育推進室 Webページ URL>

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/181/>



【指定校】

- ・柳井市立A小学校
- ・柳井市立B中学校
- ・下関市立C小学校
- ・下関市立D中学校
- ・山口県立E高等学校
- ・山口県立F総合支援学校
- ・山口県立G総合支援学校
- ・山口県立H総合支援学校

【外部専門委員】

- ・周南公立大学福祉情報学部
- ・山口大学教育学部
- ・山口県発達障害者支援センター
- ・県立特別支援学校(地域コーディネーター)
- ・ふれあい教育センター(研究指導主事)

【外部専門家】

- ・関西国際大学教育学部
- ・広島国際大学総合リハビリテーション学部

本冊子は、令和3年度から2年間にわたって開催した文部科学省事業「ICTを活用した自立活動の効果的な指導の在り方に係る調査研究」の実践校8校の取組をもとに作成しています。

表紙イラスト:宮木 彩